

2 世紀の天照大御神と 3 世紀の卑弥呼

報告書『平原弥生古墳 大日靈貴の墓』・編集委員 井手 將雪

倭国に実在した二人の女王

(一) 2 世紀の伊都国に実在した、天照大御神

1 外国の歴史書を検証する

中国の歴史書、『魏志』倭人伝によれば、「倭国の 3 世紀の邪馬台国には、女王卑弥呼が居た。」と記録されている。又「倭国の中の伊都国には、代々王が居た、」とも記録されている。その倭国とは、日本国の古代の呼び名であり、また、邪馬台国や伊都国とは、その倭国にあった 30 国の中の 1 国である。その伊都国に何代もの王が居たと記録されているのである。

まずは、その伊都国に何代もの王が居たという、歴史を解明することにしよう。しかし、その伊都国に代々王が居たという記録だけでは、実在した歴史の証明にはならないのである。そこで、伊都国に倭王が実在していたという、証拠の遺跡と遺物の実証が要求されている。

これに対して、前原市・現糸島市に在住されていた、考古学者・故原田大六氏は、平原王墓の発掘調査報告書・原田大六著『平原弥生古墳 大日靈貴の墓』(以下平原王墓の報告書)の中で次のように論証されている。

伊都国に倭王が実在していたという、その証拠として。

◎、伊都国には、①前漢鏡を持てる時代と・②後漢初期の鏡を持てる時代と・③後漢中期の鏡を持てる時代の、三代の倭王に関係した遺跡が実証されている。

1、その伊都国・第一代目の倭王の墓は、三雲南小路遺跡である。倭王墓の証拠としては、この墓に①前漢鏡を所有できる時代の日本最高数の鏡 35 面と銅剣と勾玉の、三種の宝物を副葬していたことによる。と論証されている。

2、伊都国・第二代目の墓は、②後漢初期の鏡 21 面と巴形銅器を副葬していた、井原鍬溝遺跡がある。しかしこの遺跡には、大きな鏡が無く鏡の数も少なく、三種の宝物が揃っていないので、倭王の墓ではなくて、倭王に仕えた将軍の墓であろうと論証されている。

3、そして、伊都国・第三代目の倭王の墓は、昭和 40 年当時・福岡県前原町有田字平原で発見された、平原弥生遺跡である。

その平原弥生遺跡の中にある王墓を、発掘主任の原田大六氏は、倭の女王の墓・で

あると発表されている。その証拠としては、発掘調査の結果として、平原弥生遺跡の副葬品の中に、倭国最高の宝物が実在していたのである。

その宝物とは、

- ①、八咫の寸法ある八咫鏡が4面と③後漢中期の鏡35面があった。
- ②、勾玉3個と500個の丸玉が組みになって、墓の中心部に有った。
- ③、被葬者の頭部付近に鉄素環頭大刀があった。
- ④、耳璫（女性用の耳飾）

その他、沢山の副葬品が出土した。と報告されている。（追記・これ等の出土品は一括して、平成18年6月9日に国宝に指定されている。）

以上の、副葬品が実在していた事によって、平原弥生遺跡は、伊都国・第三代目の倭の女王の墓である、と発表されているのである。

その後、原田氏は調査研究の成果として、「平原王墓」は、

- 1、西暦150年頃の墓である。
- 2、伊都国に居た三代目の王妃の墓である。
- 3、被葬者は、副葬されていた遺物の実証によって、実名を玉依姫（タマヨリ姫）といい、神格化名を大日靈貴とか天照大御神と称された人物である。と「平原王墓の報告書」において、発表されている。

ここまで実証してきて分かるように、伊都国に実在した遺跡とその副葬品の遺物によって、外国の歴史書である、『魏志』倭人伝の「伊都国に世々王有」という記録が、実在した1～2世紀の日本の倭王の歴史として証明されているのである。

2 日本の歴史書を検証する

では、外国の歴史書にまで記録されている伊都国に居た倭王の事が、日本最古の歴史書である『古事記』や『日本書紀』の中には、どのように記録されているのであろうか、それを見ることにしよう。

『古事記』に、「伊都」の文字が記録されているのは、神代史の中の「天孫降臨」の条にある。その記述によれば、

- ①、天照大御神の孫のヒコホノニニギの命は、鏡と勾玉と剣の三種の宝物を持って、伊都の地を分けに分けて、天降りした。

とある、そこには、伊都の文字が真実、はっきりと記録されている。この「伊都」の文字を『古事記』では「イツ」と呼んでいるので、伊都国の事ではないと言う人もある。しかし私は、「伊都」の文字を「イツ」と呼んでも「イト」と呼んでも同じ伊都国のことであると理解している。それは「日本」の文字を「ニホン」と呼んでも「ニッポン」と呼んでも、同じ日本国のことである。と理解出来るからである。そして、そこに実在した証拠遺跡と遺物が実証されている。

その『古事記』の記録によると、伊都の地に天降りした子孫の事を、

- 1、**第一代目**は、ヒコホノニギの命で、その王妃は、コノハナサクヤ姫である。とある。
そのコノハナサクヤ姫は、伊都国の三雲の地にある**細石（サザレイシ）**神社の祭神であり、その神社の直ぐ側には、伊都国**一代目**の、**三雲南小路遺跡**の**倭王**と**王妃の墓**が実在している。この墓には、前漢鏡を所有できる時代の**日本**で最高数の鏡**①前漢鏡**35面と**剣**と**勾玉**が副葬されていた。

- 2、次に、**第二代目**は、ヒコホホデミの命で、王妃は、トヨタマ姫である。とある。
その、ヒコホホデミの命は、原田氏が昔は、伊都国で**高千穂**と呼ばれていたであろうと論証されている**高祖山**の、西にあたる**高祖**神社の祭神として祭祀されている。移動前の**高祖**神社の直ぐ側に王墓があると推定されるが、その、ヒコホホデミの命の墓はまだ見つかってはいない。しかし、ヒコホホデミの命に仕えたであろう**将軍の墓**は前記したように、伊都国の**井原鍵溝遺跡**として実在している、この墓には、**②後漢初期の鏡**21面が副葬されていた。また、王妃の**豊玉姫**は、志登の地にある**志登**神社の祭神として祭祀されている。記録によると、里に帰られた**豊玉姫**の墓は、対馬にあると言われている。その**志登**神社の正面は、帰られた対馬の方を向いている。

- 3、次に、**第三代目**は、ウガヤフキアエズの命で、王妃は、**玉依姫**（タマヨリ姫）である。とある。

そのウガヤフキアエズの命は、伊都国の池田の地にある**産宮**神社の祭神として祭祀されている。**王妃**の**玉依姫**は、その**産宮神社**と**高祖**神社の祭神として祭祀されている。

特に**玉依姫の墓**は、伊都国に実在した**三代目**の**王妃の墓**であり八咫の寸法ある**八咫鏡**と**③後漢中期の鏡**35面と**勾玉**と**大刀**が副葬されていた。そしてこの墓は、『魏志』倭人伝の「伊都国に世々王有」の検証の時に、証拠を挙げて実証されているように、**平原王墓**の**報告書**・原田大六著『平原弥生古墳 大日靈貴の墓』平原弥生古墳調査報告書編集委員会・葦書房の中で、詳しく論証されているのである。

この様に、『古事記』の記録も、『魏志』倭人伝の記録も・伊都国に居た**倭王**の墓は**三代**であった。そして伊都国に実在する古代遺跡とその副葬品によって、『古事記』の記録も、『魏志』倭人伝の記録も、実在した**遺跡**と**遺物**によって**同じ倭王**としての関係に有ることが、実証されているのである。

以上の様に、『古事記』の記録と、伊都国に実在した**遺跡**と**遺物**の検証成果をまとめると、次のようになる。

3 日本と中国の記録が、**共通**して実証されている

- ①、『魏志』倭人伝の記録、「伊都国に世々王有。」の意味が、**一世紀**から**二世紀**にかけて伊都国に実在した、**三代**の遺跡と遺物によって実証されている。
- ②、日本の『古事記』にも、天孫は「伊都の地を分けに分けて天降りした。そしてその地には、**三代**の子孫が居た。」と、記録されている。その『古事記』の記録の意味も、**伊都国**に実在する**遺跡**と**遺物**によって、実証されている

その子孫の記録も三代である。特に、三代目の王妃の名は、『平原王墓の報告書』で論証されているように、実名を玉依姫（タマヨリ姫）といい、神格化名を大日靈貴（オホヒルメノムチ）とか天照大御神と称された人物であったのである。その証拠物件としては、この墓に副葬されていた、

- ①、平原王墓の、八咫の寸法ある八咫鏡は、三種の神器であって「伊勢神宮の八咫鏡」と、「大きさ文様ともに一致する。」と論証されている。
- ②、平原王墓の、勾玉と500個の丸玉は、『古事記』では、ヤサカマガタマの五百ツのミスマルの玉と呼ばれて、これも三種の神器として、天皇家にて継承されている。と記録されている。
- ③、以上のように、伊都国についての記録と、伊都国に実在した遺跡と副葬品の証拠によって、一人目の倭の女王は、2世紀の平原王墓の被葬者である、実名を玉依姫といい、神格化名を大日靈貴とか天照大御神と称される人物であった。と実証されているのである。

4 女王の特徴は

1、一人目の倭の女王の特徴は、

- ①、名を、玉依姫（タマヨリ姫）と言う。
- ②、鏡を多数所有していた。【副葬されていた、八咫鏡4面と③後漢鏡35面計39面の鏡。】は、大きさ・鏡数・共に弥生時代で日本一である。
- ③、『古事記』によると、玉依姫の又の名である天照大御神は、陰上（ホト）を突き死す。と有る。

2、二人目の倭の女王と推定される、「邪馬台国に居た3世紀の倭の女王・卑弥呼」も、倭国の女王で実在したとすれば、前記の 1、の①、②、③、の特徴を持って、『古事記』にも記録されていると、推定されるのである。

(二) 3世紀の・女王・卑弥呼の又の名？

1 『魏志』倭人伝の邪馬台国

『魏志』倭人伝によると、

「倭国の3世紀の邪馬台国に、女王・卑弥呼が居た。」とある。

その、女王・卑弥呼が居たと言う、邪馬台国の所在地を求めて、多くの研究者が、沢山の著書を発行されている。しかし、3世紀の女王・卑弥呼が実在した邪馬台国は、倭国の中の一国である。そんなに沢山の邪馬台国が実在していたはずは無いのである。

1、私は、その『魏志』倭人伝に記録されている邪馬台国の所在地を実証する為の手續

きとして、最初に、①『魏志』倭人伝に「伊都国に世々王有。」と記録されている、その記述が、実際に②『古事記』にも記録されていて、その③伊都国に実在する遺跡と副葬品の遺物によって、④一人目の倭の女王は、2世紀の伊都国に実在した、平原王墓の被葬者で、実名は、玉依姫といい、神格化名を大日靈貴（この名は、天照大御神の妻の意）とか天照大御神と呼ばれた、倭の女王である。と実証されているのである

2、その①『魏志』倭人伝に記録されている、邪馬台国に居た3世紀の女王・卑弥呼の事は、②『古事記』にも記録されていた、伊都国に実在した2世紀の女王のように、③3世紀の邪馬台国の女王のことも『古事記』にも記録されていると、推定されるのである。

2 『記・紀』の記録による3世紀の倭の女王

1、『古事記』の記録

その、『古事記』によると、2世紀の倭の女王・玉依姫は、カムヤマトイワレヒコの命（神武天皇）の母にあたる人である。と記録されている。

その神武天皇は、筑紫（九州）から、2世紀の後半にあった倭国の大乱によって東征して、ヤマトの地（奈良）で、第一代の天皇として即位された。とある。

その『古事記』を読み進んで行くと、

第十代の崇神天皇の時代、

「此の天皇の御代に、疫病多に起りて、人民死にて盡きむと為き。爾に天皇愁ひ歎きたまひて、神牀に坐しし夜、大物主大神、御夢に顯れて曰りたまひしく、「是は我が御心ぞ、故、意富多多泥古を以ちて、我が御前を祭らしめたまはば、神の氣起らず、國安らかに平らぎなむ。」とのりたまひき。是を以ちて驛使を四方に班ちて、意富多多泥古と謂ふ人を求めたまひし時、河内の美努村に其の人を見得て貢進りき。爾に天皇、「汝は誰が子ぞ。」と問ひ賜へば、答えて曰ししく、僕は陶津耳命の女、活玉依毘賣を娶して生める子、名は櫛御方命の子、飯肩巢見命の子、建甕槌命の子、僕意富多多泥古ぞ、」と曰しき。是に天皇大きく歡びて詔り

たまひしく、「天の下平らぎ、人民榮なむ。」とのりたまひて、即ち意富多多泥古命を以ちて神主と為て、御諸山に意富美和の天神地祇の社を定め奉りたまひき。」とある。

2、『日本書紀』の記録

この活玉依毘賣・「活玉依姫」の事が、『日本書紀』には、又の名である・倭迹迹日百襲姫命として、詳しく記録されている。

それは、『日本書紀』「日本古典文学大系」岩波書店 に、次の様に記録されている。

①、230ページには。

第7代・孝霊天皇の御代、「后、倭迹迹日百襲姫命を生む。」とある。

②、238ページには。

第10代・崇神天皇の御代、「天皇、乃ち神浅茅原に幸して、八十萬の神を會へて、卜問ふ。是の時に、神明倭迹迹日百襲姫命に憑りて曰はく、「天皇、何ぞ國の治らざることを憂ふる。若し能く我を敬ひ祭らば、必ず當に自平ぎなむ」とのたまふ。」とある。

③、240ページには。

「大田田根子に問ひて曰はく、「汝は其れ誰が子ぞ」とのたまふ。對へて曰さく、「父をば大物主大神と曰す。母をば活玉依媛と曰す。」とある。

④、244ページには。

「天皇の姑倭迹迹日百襲姫命、聰明く叡智しくして、能く未然を識りたまへり。」とある。

⑤、246ページには。

「倭迹迹日百襲姫命、大物主神の妻と為る。然れども其の神常に晝は見えずして、夜のみ来す。倭迹迹姫命、夫に語りて曰はく、「君常に晝は見えたまはねば、分明

に其の尊顔を視ること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に、仰ぎて美麗しき
 威儀を觀るたてまつらむと欲ふ」といふ。大神對へて曰はく、「言理灼然なり。吾
 明旦に汝が櫛篋に入りて居らむ。願はくは吾が形にな驚きましそ」とのりた
 まふ。爰に倭迹迹姫命、心の裏に密に異ぶ。明くるを待ちて櫛篋を見れば遂
 に美麗しき小蛇有り。其の長さ大さ衣紐の如し。即ち驚きて叫啼ぶ。時に大神恥ぢ
 て、忽ちに人の形と化りたまふ。其の妻に謂りて曰はく、「汝、忍びずして吾
 に差せつ。吾還りて汝に差せむ」とのたまふ。仍りて大虚に踐みて、御諸山に登
 ります。爰に倭迹迹姫命仰ぎ見て、悔いて急居。(此をばツキウと云ふ。) 則ち
 箸に陰を撞きて薨りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。故、時人、その墓を號け
 て、箸墓と謂ふ。是の墓は、日は人作り、夜は神作る。」とある。

『日本書紀』の記録を、以上の様に並べてみると、次の事が判明する。

第1に、

- ②、238ページで分かるように、倭迹迹日百襲姫命は、神がかり（神と一体に成る）して、神の声を崇神天皇に伝えている。これは巫女の務め。

第2に、

- ③、240ページで分かるように、父が大物主神で、母が活玉依姫である。と言う事は、活玉依姫は、大物主神の妻である事が分かる。

第3に、

- ⑤、246ページで分かるように、倭迹迹日百襲姫命は、大物主神の妻になっている。そして最後は、箸に陰を撞きて死亡されている。

- ①、上記、で分かるのは、ヤマトノ国の大物主神の妻の実名が、活玉依姫であり、又の名を、倭迹迹日百襲姫命と言っていたと、記録されているのである。そして、倭迹迹日百襲姫命は、陰を撞いて死亡されているのである。

- ②、この事は、2世紀の伊都国で、三代目の女王の実名が、玉依姫であり、又の名を、

大日靈貴（この名は・天照大御神の妻の意）とか、天照大御神と言はれていたことと、同じような内容である事が、分かるのである。

そして、最後に陰を撞いて死亡されている事も、同じである。

上記の事を纏めると

3、『古事記』『日本書紀』『魏志』の記録

2世紀の倭の女王

- ①、実名を、玉依姫と言う。
- ②、玉依姫は、八咫鏡4面と後漢鏡35面計39面の鏡を副葬していた。
- ③、玉依姫の又の名である天照大御神は、陰（ホト）を撞きて死す。

3世紀の倭の女王

- ①、実名を、活玉依姫と言う。
- ②、3世紀の女王は、魏の皇帝ら100面の鏡を貰っている。
- ③、活玉依姫の又の名である倭迹迹日百襲姫命は、陰を撞きて死す。

4、玉依姫と活玉依姫との考察

①～1、玉依姫は、2世紀の後漢の鏡を所有できる時代の、日本一の大鏡である・八咫鏡4面と、後漢中期の鏡35面を副葬していた。これは、2世紀の鏡文化の中心に居たことを実証している。それは、伊都国での出来事である。

①～2、活玉依姫は、2世紀の玉依姫から数えて、第7代目の孝霊天皇の娘で、第10代崇神天皇の御代に活躍されたと記録されている。その墓は、ヤマトノ国にある箸墓であると記されている。私はこの墓を、3世紀の鏡文化の中心にいた、倭の女王の墓であると推定するのである。其の訳は、『記・紀』には、女王の文字は一つも記されていない。しかし、女王と推定できる記述が二つある。一つは、2世紀の玉依姫であり、二

つ目は、10代後の活玉依姫である。そしてこの二人だけが陰（ホト）を撞きて死亡されているのである。

その活玉依姫の箸墓が、三世紀の鏡文化の中心に有ったとは断定はできかねる。それは、第1代の天皇の母である、2世紀の玉依姫の墓は、昭和40年に発掘調査が実施されているが、その後は、倭王を証明できる遺跡の発掘が一切、実施されていないからである。しかし『古事記』『日本書紀』『魏志』の記録と、2世紀から3世紀にかけての、倭国の遺跡と遺物の分布とを考察した結果、私は、次の様に答えを出した。

- 1、3世紀の邪馬台国は、奈良県のヤマトノ国である。
- 2、女王卑弥呼の实名は、いくたまよりひめ活玉依姫で、又の名をやまとととひもそひめの倭迹迹日百襲姫みこと命ひみこや日巫女と呼ばれた人である。

おわり